

特別展示「ファッションの考古学 ーモード・アクセサリ・メイクアップー」によせて

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



展示風景 (右写真上段の大鏡復元品は、よろいのや 明珍阿古氏製作)

京都市考古資料館では、令和6年度前期特別展示として、「ファッションの考古学ーモード・アクセサリ・メイクアップー」を開催しています。これまで当館では、時代ごとの遺跡・遺物や市内の地域・遺跡の調査成果を紹介する特別展示を多く開催してきましたが、今回はファッションをテーマとした通史的展示となっています。

人々が身にまとう衣服は、寒暖などから身体を守るために発明されたと考えられています。やがて衣服は自然環境のみならず、性別・年齢・身分・職業などの社会的な規制、さらには個人の好みによってさまざ

まに展開することとなります。これをファッションと呼ぶならば、ファッションは極めて歴史性を帯びたものといえるでしょう。また、ファッションは時代の流行によって移り変わることを特徴とします。さらにファッションは衣服のみならず、身に付ける装飾品や身体を飾る化粧にも展開する多様性を見せるようになります。

今回の展示では、ファッションをモード（身に付ける衣服）・アクセサリ（装飾品）・メイクアップ（化粧・化粧道具）の要素から、京都市内の遺跡から出土した遺物をはじめ、絵画資料や復元品を合わ

せて陳列することで、縄文時代から江戸時代のファッションの歴史を紹介します。考古学からわかるファッションの世界を体感してください。

縄文時代のアクセサリ 縄文時代のアクセサリには耳たぶに孔をあけて装着した耳栓^{じせん}、2個一組で組み合わせて手首や足首を飾っていた半輪状土製品、薄緑色のヒスイ製の丸玉、滑石製の勾玉などがあります。ところが現代のピアス・ブレスレット・ペンダントにあたるこれらアクセサリは、飛鳥時代以降は姿を消してしまいます。



縄文時代のアクセサリー



簪（ガラス製）



ボタン



櫛



鍔



鉄漿道具

ボタン 衣服の合わせ目などを綴じ合わせる留め具です。骨製で表面を緩い球面に仕上げ、裏面には糸を通す孔が加工されています。江戸時代の遺跡から出土していることから「南蛮貿易」でもたらされ定着したのでしょう。どのような衣服に使用されていたのか気になります。

鍔（つば） 刀剣の刀身と柄の間にはさんで、柄を握る手を防護する刀装具です。鉄や銅でできた分厚い板状で、小柄や筭（こうがい）を挿す孔が加工されています。江戸時代には精密な透かしで様々な模様がデザインされたり、象嵌（ぞうがん）などによる装

飾が豊かに施されるようになりました。

簪（かんざし） 束ねた髪に挿して髪型を固定するアクセサリーです。木・骨・鼈甲・象牙・金属・ガラスなど様々な素材を使用しています。髪に挿すため先端は尖っており、また、抜け落ちないように凹凸や二股に加工しています。手元側は髪飾りとしての装飾が進み細工が施されるきらびやかなものになりました。

櫛 髪を梳いて整える道具で、板状の長辺の片方には等間隔の切込が加工されています。木・骨・鼈甲などの素材を使用しており、木製品で

は緻密なツゲやイスノキ製が多くを占めます。のちには髪飾りとして漆塗りや蒔絵（まきえ）などの装飾が施されるものも増加しました。蒔絵のある櫛は島原に接する御土居の堀から出土しています。

鉄漿道具（おはぐろどうぐ）
鉄漿（おはぐろ）とは、鉄片を酢酸に溶かしたか（ね）みず（むしこぶ）鉄漿水とヌルデの寄生虫の虫瘤（ふしこ）成分とする五倍子粉を歯に繰り返し塗り付けて歯を黒く染める化粧法です。渡し金（たらい）は盥（か）ね（わかし）道具を載せる金属板、鉄漿沸（か）ね（わかし）は鉄漿水を作って注ぐ道具、鉄漿碗（か）ね（わかし）はこれを受ける容器です。

（山本雅和）